

第77回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2015年10月12日(金) 14時～17時

兼題「干柿」「花野」

- 川井素山 ○穂薄にかかる芋煮の湯気の帯
繪行灯映す水辺や白芙蓉
洋館のカラフルな窓秋日濃し
干柿軒埋めつくし簾ごと
- 保井寶正 ○柿すだれ風を味方につけてをり
新蕎麦や青味のかおり手繰よせ
終章に命ふるわす秋の蝶
万華鏡歩板も沈む花野かな
- 青木英林 ○柿を剥く手付き年期を物語る
縁側で猫も欠伸の秋の暮
山栗をリスと競ひて探す森
杯重ね新酒に酔うて里の夜
- 後藤克彦 ○^{はざくみ}稲架組の横に残りし案山子かな
茶会の末席汚す秋の蠅
秋桜倒れし茎に花咲かす
吊し柿いつ食べ頃か軒見上ぐ
- 佐久間喬 ○栗を剥く妻のつむりに白きもの
^お炭熾こり火焰地獄の秋刀魚かな
幼な子は花の名聞きつ花野行く
柿すだれ沈む陽吸ひて旨味増す
- 丸山酔宵子 ○雲切れて ^{かんぼせ}顔 ^{スーパームーン}照らす巨き月
夕暮れてつるべ落としの花野かな
陽だまりでワイン片手に秋の暮
焼きたての秋刀魚にかぼすジュッとかけ

- 菊地崇之 ○赤い羽根人垣を生む澄みし声
甲斐性や一等賞と秋晴れに
菊月や一人膝抱くよもすがら
甘干や荒^{すさ}ぶ冷氣に肌曝^{さら}す
- 牧野里山 ○木漏れ日が花野の径を示しをり
秋の空海との境なくしをり
吊し柿一つ軒先揺れて居り
球探し探し当てれば栗の毬
- 吉田啓悟 ○手入れせし松の匂へる夕餉かな
とびこんで煙の先の秋刀魚かな
大いなる悲嘆の年や鰯雲
遺族から干柿とどき兄偲ぶ
- 佐久間たか子 ○薪割つて大気とよもす秋澄めり
萩の風洗い髪ゆれもの思う
吊し柿陽もろうてなお墨色に
花野来て隠れては見える子の遊ぶ
- 佐々木彩女 ○行く末も知れずひたすら花野行き
はぜ釣りの竿が行き交ふ川の町
干し柿の所を得たる古き軒
店灯り主婦と大根^{だいこん}の艶めきて
- 山本草風 ○秋の野は寂しき色の貼絵かな
時たちて稲架^{はぎ}にかけたる鋤や鎌
初秋刀魚七輪さがし炭探す
花野くる乙女の如く化粧して
- 佐伯武雄 ○秋の日の墓石に耳を澄ましけり
見晴るかす眼が染まる紅葉狩
吊るし柿故郷の匂ひかけめぐり
早起に体強張る冬近し

大山龍海 ○修善寺の湯けむりに舞う落葉かな
干柿に白粉覆いて寒ぬるむ
紅葉に源の墓荒れすさび
露天風呂滝音涼し肌熱し

金森純女 ○秋茜ついと高みへ上りけり
雨つぶも金木犀のかほりして
どこまでもどこまでもただ翺雲
干し柿もわれも粉を吹く夕べかな

中山志津久 ○家人なき古家の石榴はじけ待つ
うつりゆく秋色さがす車窓かな
しわ顔も味わい深し干柿や
秋時雨心のまよいとリンクする

次回 「萩句会」

日時 2015年11月9日（月）14時～17時
兼題『夜なべ』か『菊人形』どちらか
当季雑詠三句 計四句